

薬剤師の情報提供に対する妊婦の服薬への 心理的影響度の検証

Investigation of the extent of psychological effects of pharmacists' provision of information to
pregnant women regarding medicine use

福田 宣子¹ 湯本 哲郎*² 石田 諭史³ 関根 令奈¹ 松本すずか¹ 石塚 和美⁴
鳥越 一宏⁴ 里 史明² 酒井 寛泰² 櫻井正太郎⁴ 小井戸茂⁵ 稲葉健二郎¹

Noriko Fukuda¹, Tetsuro Yumoto*², Satoshi Ishida³, Rena Sekine¹, Suzuka Matsumoto¹, Kazumi Ishitsuka⁴,
Kazuhiro Torigoe⁴, Fumiaki Sato², Hiroyasu Sakai², Shotaro Sakurai⁴, Shigeru Koido⁵, Kenjiro Inaba¹

キーワード：妊婦、服薬説明、心理的影響

Keyword : Pregnant women, drug taking-related explanations, psychological effects

要旨：妊婦は、薬物が胎児へ及ぼす影響に不安を抱いている。今回、薬剤師による妊婦への情報提供内容に着目し、妊婦の服薬への心理的影響度に及ぼす効果を検証した。

総合相模更生病院が母親学級で実施しているアンケート調査で得られた個票データを解析対象とした。「ドラッグストアで風邪薬の購入」という状況設定のもと、薬剤師による情報提供内容として、胎児への影響に関する5文例を提示し、各指導内容に対する妊婦の心理的影響度を測定した。

調査結果より、薬剤師による情報提供5文例に対する妊婦の心理的影響度は、「母体→胎児」で最も安心感が高かった。その理由として妊婦自身の症状の悪化が原因で胎児へ悪影響が及ぶことを回避したい、つまり、「胎児のために服薬」するという使命感が関与したものと考えられた。この調査は、妊婦の服薬に対する不安軽減に向けた服薬説明の個別化を図るための基礎的知見を得る上で非常に意義あるものと考ええる。

Abstract ; A pregnant woman worries about the effects of medicines on her unborn child. We focused on the contents of information provided by pharmacists to pregnant women and investigated the extent of the psychological effects of such information provision on medicine use by pregnant women.

We analyzed individual data obtained from a questionnaire-based survey performed at a childbirth education course at General Sagami Kosei Hospital (Kanagawa Prefecture, Japan). The hypothetical situation selected was "the purchase of common cold medicine at a drug store," and there were five differing contents (five cases) of the information provided by the pharmacist. Measurements were then made of the extent of psychological effects on the pregnant women for each case.

From the survey results, as for the extent of psychological effects for the five separate cases of pharmacist's information provision, "from the mother to the unborn child" was the information that gave the highest sense of security. The reason given was that the women wanted to avoid negative effects on their unborn children as caused by a worsening of their own (i.e., the pregnant women's) symptoms; that is, it was thought that a "sense of duty" was involved regarding "the taking of medicine on behalf of the unborn child." We believe that this was an extremely important survey towards the reduction of anxiety in pregnant women regarding drug taking in that basic findings were obtained for designing individual explanations concerning drug taking.

所属：1 総合相模更生病院薬剤部 2 星薬科大学 薬剤師職能開発研究部門 3 東京足立病院薬局 4 星薬科大学
実務教育研究部門 5 総合相模更生病院産婦人科

- 1 Department of pharmacy, General Sagami Kosei Hospital
- 2 Division of pharmacy professional development and research, Hoshi University
- 3 Department of pharmacy, Tokyo Adachi Hospital
- 4 Division of applied pharmaceutical education and research, Hoshi University
- 5 Department of Obstetrics and Gynecology, General Sagami Kosei Hospital

Corresponding Author : 湯本哲郎 〒142-8501 東京都品川区荏原2-4-41
e-mail : t-yumoto@hoshi.ac.jp

1. 目的

多くの妊婦は、妊娠を機会に服薬への意識が変化する¹⁾。つまり、催奇形性を代表とした薬物の胎児への影響が大きな不安要因となり、可能な限り服薬を避ける傾向がある^{2,3)}。しかし、症状悪化を背景に薬物療法が必要となるケースでは、薬剤師が妊婦とのコミュニケーションから協力関係を構築し、服薬説明を通じて妊婦の不安軽減を図ることが重要となる^{2,4)}。

妊婦の服薬への不安軽減にあたり、薬剤師は、「自然奇形発生率」、「薬物による催奇形性や胎児毒性」、「服薬時期（妊娠周期）による危険度」、「母体の症状悪化による胎児への影響」など様々な情報を活用している⁵⁻⁹⁾。しかし、妊婦へ提供されるこれらの情報自体が妊婦の服薬への不安軽減へ及ぼす影響度については、検証されていないのが現状である。

そこで本研究では、薬剤師が日常的に活用する妊婦への情報提供内容に着目し、情報提供内容が妊婦の服薬への心理的影響に及ぼす効果を検証した。さらに、自分の性格を「神経質」と評価した妊婦に焦点を当て、妊婦の主観的な性格評価の有無が情報提供内容に対する心理的影響へ及ぼす効果についても検証した。

2. 方法

総合相模更生病院（以下、当院）が母親学級で実施しているアンケート調査（調査期間：2012年4月～9月、対象：妊婦65名）で得られた個票データを解析対象とした。

2-1. 対象者の基本属性と妊娠中の服薬に関する状況把握

個票データをもとに、対象者の基本属性（年齢、妊娠週数、出産経験）、妊娠中における医療用医薬品、一般用医薬品、健康食品・サプリメントの使用経験、医療従事者による説明後の印象（不安や疑問など）、妊婦として

情報提供を希望する薬剤剤について単純集計を行った。

2-2. 薬剤師の情報提供内容に対する妊婦の服薬への心理的影響度の検証

個票データのうち、Table 1に示した「妊娠20週の妊婦がドラッグストアでかぜ薬（総合感冒薬）を購入する」という状況設定のもと、薬剤師による情報提供5文例（a：作用緩徐、b：妊娠周期、c：自然奇形、d：エビデンス、e：母体→胎児）に対して回答が得られた妊婦の心理的影響度（5：とても安心できる、4：安心できる、3：どちらとも言えない、2：不安になる、1：とても不安になる）を単純集計した。また、各文例において、「とても安心できる」、「安心できる」と回答した妊婦を「安心群」、「不安になる」、「とても不安になる」と回答した妊婦を「非安心群」とし、各文例における心理的影響度の決定に強く影響を受けた表現（該当文章、単語を下線で回答）を対象に、テキストマイニングを用いて「安心群」での特徴表現を抽出した。なお、個票データの状況設定にあたり、妊娠週数は、従来母親学級へ参加している妊婦の妊娠週数を参考に設定した。また、母親学級において実施したアンケート調査（調査期間：2011年5月～9月、対象：妊婦46名）の設問項目である「妊娠中に情報提供を必要とする薬剤」の結果と妊婦からの相談事例に関する文献調査^{3,8-10)}より、対象薬剤を一般用医薬品のかぜ薬に設定した。薬剤師による情報提供内容（5文例）は、妊婦への服薬カウンセリングに関する文献情報⁵⁻¹⁰⁾をもとに、産科病棟や母親学級などで日常的に妊婦への服薬指導に携わっている当院薬剤師8名で決定した。なお、薬剤師間での説明方法によるバイアスを回避するために情報提供方法は文書とした。

Table 1 状況設定と薬剤師による情報提供内容

I. 状況設定	
あなたは現在妊娠20週の妊婦です。 朝からのどが痛く、夜になると鼻水と微熱も出てきました。明日はどうしても仕事を休めません。日曜日の夜のため病院にかかる手段はなく、コンビニで薬を買うのは不安なのでドラッグストアに行き、薬剤師の説明を受けて、かぜ薬を購入することにしました。	
II. 薬剤師による情報提供内容	
カテゴリー名称*	情報提供内容
a) 作用緩徐	「病院でもらうお薬よりも作用が穏やかなので、あまり心配なさらなくても大丈夫ですよ。」
b) 妊娠周期	「妊娠4～7週の時期は赤ちゃんの手や足、心臓などが作られるもっとも重要な時期で、お薬に対しても最も敏感な時期です。 妊娠8～15週では薬に対する赤ちゃんの感受性は次第に低下してはいますが、生殖器などに影響する可能性があります。その他の時期でも全く影響がないとは言えませんが、〇〇さんは現在20週です。ですからあまり心配なさらなくても大丈夫ですよ。」
c) 自然奇形	「一般的に先天性の異常をもつ赤ちゃんは約100人に3人の割合で生まれてくると言われています。また、薬が原因で先天性の異常をもつ赤ちゃんは約10,000人に2人ほどしか生まれません。 つまり、薬を飲むことで先天性の異常をもつ赤ちゃんが生まれる確率は、自然に先天性の異常をもつ赤ちゃんが生まれる確率より低いと考えられます。ですからあまり心配なさらなくても大丈夫ですよ。」
d) エビデンス	「かぜ薬の中で咳止めとしてよく入っているこの成分を服用した場合、奇形が生まれたという報告もありますが、一方では奇形が出なかったという報告もあります。 つまりこの成分と奇形との関係性は、はっきりしていないと考えられます。また、外国（オーストラリア）では奇形頻度の増加はない薬に分類されています。ですからあまり心配なさらなくても大丈夫ですよ。」
e) 母体→胎児	「かぜが悪化してしまうと肺炎などを引き起こして入院してしまうことも考えられます。 また、発熱による脱水などが胎児に悪影響を与えてしまうこともありますので早めにお薬を飲んで症状を楽にしたほうがいいと思います。ですからあまり心配なさらなくても大丈夫ですよ。」

*カテゴリー名称は、情報提供内容をもとに命名

2-3. 性格を「神経質」と回答した妊婦の情報提供内容に対する服薬への心理的影響度の検証

個票データにおいて「神経質な性格ですか」という設問に「はい」と回答した妊婦を対象として、情報提供5文例に対する心理的影響度を項目2-2.と同様の方法で単純集計した。加えて、性格を神経質と回答した妊婦を「神経質群」、性格を神経質と回答しなかった妊婦を「非神経質群」とし、心理的影響度の決定に強く影響を受けた表現（該当文章、単語を下線で回答）を対象に、テキストマイニングを用いて「神経質群」での特徴表現を抽出した。

2-4. 倫理的配慮について

個票データ（アンケート調査票）の利用な

らびに外部への公表にあたり、当院倫理委員会の承認を得た。

2-5. 統計処理

テキストマイニングによる特徴単語の抽出は、Text Mining Studio4.1（数理システム）、また、データマイニングは、JMP®8.2（SAS Institute）を使用した。なお、有意水準は0.05とした。

3. 結果

3-1. 対象者の基本属性と妊娠中の服薬に関する状況把握

対象者の年齢は、10代3名（4.6%）、20代38名（58.5%）、30代22名（33.8%）、無回答2名（3.1%）であり、妊娠週数は、10～14週4名（6.2%）、15～19週26名（40.0%）、20

～24週29名（44.6%）、25週以上4名（6.2%）、無回答2名（3.0%）であった。また、出産経験は、初産58名（89.2%）、経産4名（6.2%）、無回答3名（4.6%）であった。妊娠中における医療用医薬品の使用経験者は16名（24.6%）であり、便秘薬（7件）で最も多く、以下、切迫早産治療薬（4件）、貧血治療薬（1件）、漢方薬（1件）、解熱・鎮痛薬（1件）、その他（5件）であった（複数回答）。一般用医薬品の使用経験者は無く、健康食品・サプリメントの使用経験者は29名（44.6%）であり、葉酸（26件）で最も多く、以下、鉄分（9件）、カルシウム（4件）、ビタミンB群（2件）、ビタミンC（2件）、その他（2件）であった（複数回答）。妊娠中の服薬に関する医療従事者による説明後の印象（不安や疑問など）は、30名（46.2%）より回答が得られ、「いつも納得（安心）できる」と回答した妊婦は18名で最も多く、以下、「不安や疑問が残るときがある」で11名、「不安や疑問が大きく残る」で1名であった。また、不安や疑問の理由としては、「胎児に与える影響について」が10件で最も多く、以下、「母体に起こる副作用について」で4件、「治療の必要性について」で3件、「お薬の効能や効果について」で3件、その他（2件）

であった（複数回答）。妊婦として情報提供を希望する薬剤の上位3項目は、かぜ薬（25件）、便秘薬（20件）、ワクチン（15件）であった（複数回答）。

3-2. 薬剤師の情報提供内容に対する妊婦の服薬への心理的影響度の検証

薬剤師による情報提供5文例に対する妊婦の心理的影響度は、「母体→胎児」で最も安心感が高く、以下、「妊娠周期」、「自然奇形」、「作用緩徐」、「エビデンス」であった（Fig. 1）。各文例における安心群での特徴表現は、「妊娠周期」で「心配-なさる+ない」、「自然奇形」で「10,000人-もつ」、「2人-もつ」、「エビデンス」で「奇形頻度-増加+ない」、「薬-分類」が抽出された（Table 2）。

3-3. 性格を「神経質」と回答した妊婦の情報提供内容に対する服薬への心理的影響度の検証

薬剤師による情報提供5文例に対する妊婦（神経質群）の心理的影響度は、「母体→胎児」で最も安心感が高く得られ、以下、「自然奇形」、「妊娠周期」、「作用緩徐」、「エビデンス」であった（Fig. 2）。また、各文例における神経質群での有意な特徴表現は抽出されなかった。

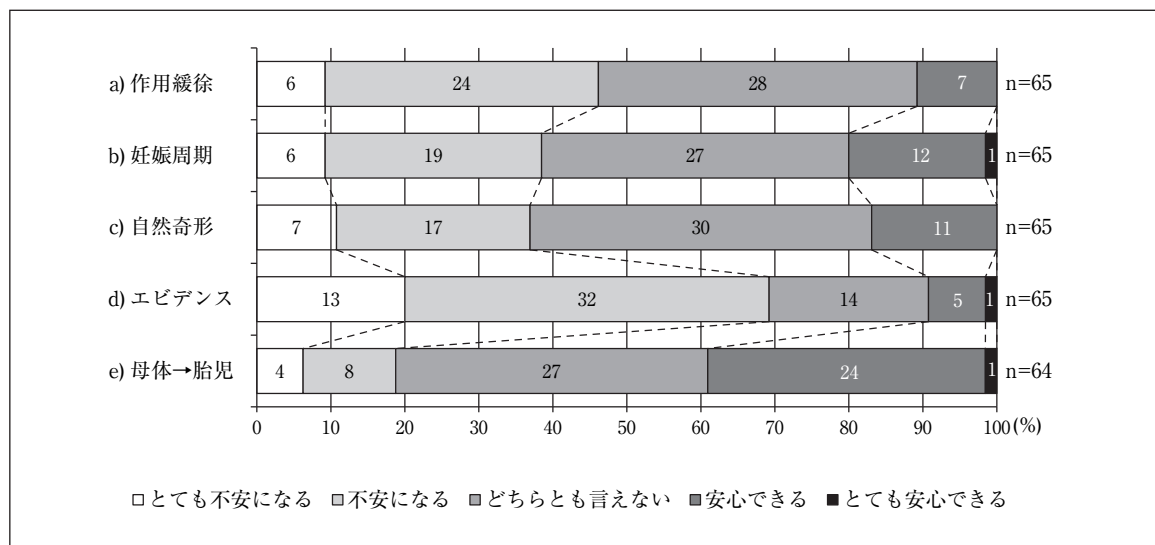


Fig. 1 各文例における妊婦の心理的影響度

Table 2 各文例における安心群の特徴表現

a. 作用緩徐		b. 妊娠周期		c. 自然奇形		d. エビデンス		e. 母体→胎児	
安心群/非安心群 (欠損値を除く)	7/30	安心群/非安心群 (欠損値を除く)	13/25	安心群/非安心群 (欠損値を除く)	11/24	安心群/非安心群 (欠損値を除く)	6/45	安心群/非安心群 (欠損値を除く)	12/25
特徴表現	カイ二乗値	特徴表現	カイ二乗値	特徴表現	カイ二乗値	特徴表現	カイ二乗値	特徴表現	カイ二乗値
心配-なさる+ない	1.540	心配-なさる+ない	4.826*	10,000人-もつ	4.258*	奇形頻度-増加+ない	9.363**	悪影響-与える	2.093
作用-穏やか	0.140	妊娠4~7週-敏感	1.93	2人-もつ	4.258*	薬-分類	9.363**	胎児-与える	1.752
		妊娠8~15週-低下	1.93	心配-なさる+ない	2.108	外国-増加+ない	0.871	脱水-与える	1.426
		感受性-低下	1.448	自然-もつ	0.959			発熱-脱水	0.020
		低下-可能性	0.219	確率-低い	0.534				
				赤ちゃん-生まれる	0.082				
				薬-飲む	0.003				

※安心群:「とても安心できる」「安心できる」、非安心群:「とても不安になる」「不安になる」

*p<0.05, **p<0.01: Statistically significant differences between the preparations.

4. 考察

調査結果より、妊娠中における一般用医薬品の使用は見られなかったが、最も情報提供を希望する薬剤としてかぜ薬が挙げられた。これは、妊娠合併症治療薬とは別に身近なかぜ薬の情報へ関心があることを示しており、薬剤師による情報提供の重要性が示唆された。また、医療従事者からの服薬に関する説明に対して、不安や疑問の残る妊婦が存在(回答数30名に対して4割)したことから、より安心感(不安軽減)を高めるために妊婦の背景に合わせた適切な情報提供が重要であることが示唆された。

薬剤師が日常的に活用している妊婦への情報提供内容(5文例)が妊婦の服薬への心理的影響に及ぼす効果を検証した結果、「母体→胎児」で安心感が最も高く得られた理由として、自分自身の症状(病状)の悪化が原因で子供(胎児)へ悪影響が及ぶことを回避したい、つまり、「胎児のために服薬」という使命感(責任)が関与したものと考えられた。

妊婦が情報提供内容(5文例)に対して得た心理的影響度の比較より、安心感が高く得られた上位3項目は、「母体→胎児」、「妊娠周期」、「自然奇形」であった。「母体→胎児」、「妊娠周期」で安心感が得られたのは、妊婦自身の現状と関連性の強い内容であったことが理由として考えられた。また、「自然奇形」

では、文例中の「薬が原因で先天性の異常をもつ赤ちゃんは約10,000人に2人ほどしか生まれません」において安心群での特徴表現が抽出されており、先天異常の自然発生頻度と服薬に伴う催奇形性発生頻度を具体的な数字で比較^{5,6)}し、服薬リスクを客観的に確認できたことが安心感向上に影響したものと考えられた。「エビデンス」に対して得られる安心感は低い結果となったが、文例中の「外国(オーストラリア)では奇形頻度の増加はない薬に分類されています」において安心群で特徴表現が抽出されており、論理的な説明を求める妊婦に対して使用することで服薬への安心感を高める可能性が示唆された。

自分の性格を「神経質」と評価した妊婦(神経質群)の情報提供内容(5文例)に対する心理的影響度は、上位3項目を含めて調査対象全体での結果とほぼ同様の傾向となった。しかし、「エビデンス」は、神経質群で唯一「とても安心できる」との評価が得られたことから、回答数を増やして検証する有用性が示唆された。

5. 結論

服薬に不安を抱えた妊婦に対して、薬剤師が服薬説明を困難とする要因に、産婦人科医師と比較して協力関係を構築する機会(時間)が少ない点や情報提供内容が妊婦へどのように受入れられているかが不透明な点などが挙

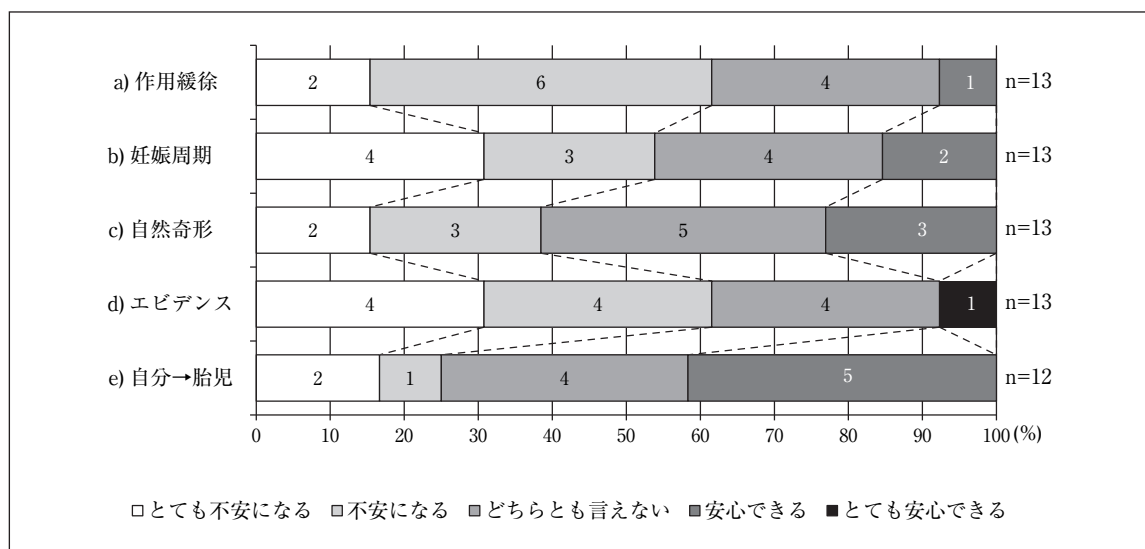


Fig. 2 各文例における神経質な性格と回答した妊婦の心理的影響度

げられる。今回、我々は薬剤師が日常的に活用している情報提供内容に焦点を当て、妊婦の心理面へ実際に及ぼす影響を検討した。妊婦が不安に感じる胎児への影響に関しては、薬だけでなく妊婦自身の症状（病状）も考慮が必要な点、妊婦の使命感（責任）や妊娠週数といった現状に配慮した情報提供が有用である点、神経質な妊婦に対しては、言葉の選択に十分配慮し、状況に応じて論理的な説明が有用である可能性などを妊婦自身から客観的に確認できたことは、妊婦の服薬に対する不安軽減に向けた服薬説明の個別化を図るための基礎的知見を得る上で非常に意義あるものと考えられる。

引用文献

- 1) 板真弓、荒堀憲二、妊婦の薬剤に関する意識調査、岐阜県母性衛生学会雑誌、29、59-61[2002]
- 2) 中島研、石井真理子、櫛田賢次、村島温子、山口晃史、渡邊典芳、荒田尚子、伊藤直樹、渡邊央美、入江聖子、北川道弘、相談者が予測する妊娠中の薬剤使用による先天奇形発生率とカウンセリングによる改善の評価、日本病院薬剤師会雑誌、45、377-380[2009]
- 3) 刈込博、井上忠夫、酒見智子、佐藤孝道、妊婦に対する服薬カウンセリング、日本病院薬剤師

師会雑誌、44、1369-1372[2008]

- 4) 高儀佳代子、恩田光子、岩城晶文、西川直樹、荒川行生、テキストマイニングを用いた妊婦・授乳婦の服薬に対する不安についての分析、医療薬学、37、111-117[2011]
- 5) 林昌洋、服薬中の妊産婦に対する適切な対処とケアの留意点 妊婦・授乳婦の服薬に関する知識とカウンセリングのポイント（解説/特集）、妊産婦と赤ちゃんケア1、66-76[2009]
- 6) 丸山精一、外山聡、佐藤博、臨床でどう実践するか 妊婦・授乳婦と薬剤師のリスクコミュニケーション－妊婦服薬カウンセリングの実践、月間薬事、53、355-361[2011]
- 7) 伊藤真也、村島温子、共編、薬物治療コンサルテーション 妊娠と授乳、南山堂、[2010]
- 8) 林昌洋、佐藤孝道、北川浩明、共編、実践 妊娠と薬 第2版、じほう、[2010]
- 9) 林昌洋 監、石川洋一 監・編、第2版 妊娠・授乳とくすりQ&A -安全・適正な薬物治療のために-、じほう、[2013]
- 10) 村島温子、山内愛、妊娠・授乳と薬の知識 飲んで大丈夫?やめて大丈夫?、東京医学書院、[2010]